河中島合戦次第

横氏著

河中嶋五ヶ度合戦次第

全

リ 5
2169

伊
2.169

宮内省圖書寮

就伊尋昏上信信州河中島五ヶ度会戦之次第

一信州五郡の領主村上左衛門尉義清ハ清和七孫氏ヨ
て伊豫守頼義の舎弟陸奥守　の子白河院荒人頼
清初て信州に住居顕清四代の孫荒人為國其子村上
判官代基國ヶ後胤なり高梨橋津守政頼も伊豫守
頼義の舎弟井上掃部頭頼季三代の孫高梨七郎盛光
ヶ後胤なり井上ハ四ヶ清政も高梨一流須田相模守
親満も同一家島津右京進親久ハ頼朝右大將家の
御子島津忠久ヶ後胤いつれも信州の豪家なり右
の輩中ハの武田大信太夫晴信ハ打負皆越後へ落来
り長尾景虎を牡ヶれ中にも村上義清ハ多年武田晴
信と取合逆と打負天文七二年六月ヨ城府へ落来り

景虎を牧みず領坂木へ帰城申候の事を以て景虎此
年間二月に北四歳にて初て上洛是ハ前年天文九
一年五月ヨ勅使野宮使者ヲ景虎を弾正少弼従五位
下ニ任セらる是に依て四礼として上洛ヲ景虎
則条内裏ハ修ハ景殿を以免ハ出敬を奉拝
天盃を以下又ハ方義輝ヲ(御自見)種々の御懇情
有之 十月ヨ帰国 所ハ六月に村上義清落来ル景虎
を頼ハ加海高梨政頼井上清政四郎播磨陸親久
栗田清野ハ下皆進ヲ越後を頼加勢合力を乞ふ
十月十五に四陣ヲ整て犀川信州へ表向武田ヲ屬を
ヲ軍の領分ハ少ハ放火又已の館ヲ引義見合右軍
の仕ハ無拍遠ハ年島へ来月朝日に居陣晴信も

一二万にて出張四十九日ヲ其間一里半日ニ七ヲ合戦
ハ七ヲ景虎ヲ年賀状ヲ献を使ヲて明日有無の答戦
ヲ仕ヲ申を備弧を定メ中ヲて松の中ヲ人数を
ハ一ハ先ハ長尾平八郎安田掃部助つて長尾包
四郎元井日向ヲ信元北條修理進景春川十郎左
右ハ備ヲ右の横絶ハ祖父郎左衛門尉行朝岩
掃部助利宣右の奇兵ハ長尾七郎景宗四郎包
田原左衛門尉盛朝二の実の左ヲ小田切治部少輔播負
善川伊豆守義豊山本宮内丞(後号治部少輔孝長)吉江左ノ助宗
後藤江神五郎実孫修理亮ハ長尾ヲ備ノ尉景盛小條
丹後守長国諸後ハ郎利朝柿崎和泉景家宮尾
義孫ヲ宗行大国修理亮等七ヲ五四十九箇一ヲ

の板ヨ 紅九郎ヨリ作ル所ノ越後方ヨリ一戦
を始メ武田方ニハ十四度ニ亡信防戦ニ及ヒ敵味
方員死人不知数下茅宮社橋を迯越ス迯越末の下
刻ニ今戦勝負区ニ成ル越後方筑前守
橋ヲ上ル事度ニ武田勢の後一廻ヲ以故晴信方無
敗軍横田作兵衛大坂板垣三郎後信濃守義元ヲ
加勢朝比奈左京進武田左馬助宮山右馬ヲ半蔵
善四郎二番田源左衛門ヲ以ヲ第刑部少輔ヲ
始甲斐方五千騎討死之則十二月ヲ京都ヲ方ヘ注
進ス飯伊豫守等特ニ感し是則景虎と晴信と手合の
初合戦之事ハ景虎ハ七尾城ヲ少郷と号実東管領
領上杉憲政ヲ小係氏康ヲ仕詰ヲ越後ヘ迯管領

獄と上杉の苗字義宣憲政の一字を給ん景虎苗字と
苦領職ハ辞退し名ヲ景虎と改ヲ上杉と改ヲ天文ヲ
二年ヲ春の義之日年八月初政虎越後ヲ立川中島
ヲ見物ヲ陣永中ハ越後の国ヲ上原少
弼入道上杉宣憲の弟之宣憲信濃守智之宣実迯ヲ
の後ヲ後宣ヲ少弼入道と再婚ヲ上原の名ヲ名ヲ山浦主
杉入道山内ヲ伊豫ヲ大国主中ハ道ヲ金ヲ地ヲ色部修理
亮貞武部七郎ヲ勢八千ヲ通信ハ郎川中島ヲ陣ヲ
張ヲ中ヲ見ヲハ村上義清二の日川田ヲ原ヲ石川伯ヲ
彦明ヲ左馬助ヲ長ヲ原源ヲ郎ヲ新左衛門ヲ板垣
ハ掃部和泉ヲ景家ヲ小原安芸ヲ長朝ヲ先利上総ヲ廣
後大関阿波ヲ親益四郎ヲ信義ハ本社ヲ紀ヲ蒙秀
秋ヲ下野ヲ朝信ヲ松川ヲ陽ヲ元長中原越前ヲ藤資

黒川備前守為雪 新発田左馬助長敦 松倉左近将監家
下除左衛門加賀 伊丹左馬助 新庄丹後守 加賀
伊予守 見山右兵衛尉 直江大和 上杉宮内
柏崎日向守 大熊兵部 高橋 桃井清左衛門 直江左馬
崎左馬助 甘糟左近将監 神
長井丹後守 尚光 島山因幡守 信負 平賀志摩守 牧左
領家 柳沢 竹俣 竹俣兵部 秀清 各 六組の侍大将二行
二陣を張 横を進 之 字佐 兵部 定行 四千 松平
大膳 松平内匠助 各 諸 の服 之典 寄 箭奉行
小上田 政景 長尾 越前 長尾 政景 飯野景久 古志景信
刑和 実景 四人 皆 長尾 同名 諸信 一門 越後勢
都合八千 軍門を越 綱島 丹波島 原の町に移

十二

翼 を張 中
一 武田晴信 四千 川中島 を渡 男 陣 一入十
方 人数 推 高 在 陣 取 先 を
高坂 正 加 右 前 向
大 助 宝 賀 内 馬場 武部 各七 組 勢
先陣 進 旗 二 百八 真田 正 幸隆 信 科 正
本 和 信 幸 四 組 真勢 子 信 海
野 幸 信 宝 田 石見 軍 信 敦 矢代 蔵 四 組
四 七 組 字 武者 仁科 上 内 真田 右 根 山
守 井上 信 五 組 真勢 四千 二行 立 陣 張
越 前 幸 八 武田 左馬助 信 小笠原 長 諏
板垣 信 信 信 晴信 牧 八 千騎 雑兵

千代藩中の麓（ザイ）に伝屋敷を設け昌景阿刀部（アトベ）大輔
信玄七宮殿盛大久保内匠下鳴田辺小山田三郎兵
山中勘助勝頼を殺八人晴信将机の左右に立ち家の
侍と一象信濃を形家遠見山城を実現是に晴信
の陣幕まで武田の本陣を取り武田一下山行田を軍部入道
武田信濃入道浄加和賀尾張部少輔昌盛土屋
伊勢守宗門入道六頭三郎二子男弟三郎弟
左馬之助兵部少輔日数桃義中に陣を合戦に
なる

一 天文十二年八月十日の暁越後の陣より軍列の者
二三十人出明より出て武田の所と甲州の先手二手に
陣より足軽右許鉄出仕軍列を遠田所と軍して工と

故越後方村上義清方梨政敦の足軽大将小宮平九郎
あ藤八郎左衛門之尉人数の中より道ふ伏居て高坂
の足軽を引色と右馬助討死を見て高坂弾正義
合伊勢守市郎右衛門家賀右衛門勝陣に百騎許家
出し喚叫て越後方の足軽を追立て上杉先手の者
ことに推参の者を義は政敦武家の軍兵一度に突
て出追討の程に武田方百騎の兵一騎も不残討死中
の方数人を小田切市郎家賀一の者を切捨て元の
陣すて引退中に武田方不負追立られ
を見て志田章隆保科弾正信濃守市川新郎
右二の日より突て出て
を追返 追討 討死体の本戸口迄付入りて義

法政軍も既ニ花見ヶ原ニ二の日より越後の侍川
田弥馬守方ニ使を遣し高梨保武者
の由より彼田屋敷を立て国情を枝条を作り名立ヶ
の侍共勢四千許にて関を上げ勢出武田勢を迎出し
迎撃し逃を追て武田の陣場迄の志に迫て武と雨
四了該敵百計に搭凱を作り本陣へ引退る高梨保
科真鍋清兵衛市川に迫し上杉勢を迫至せ
川田方に本陣を高梨枝条新井田村上義清方軍政
軍一度に雨て迫迫て推寄せ遣ます〻戦中
〃平野越後の軍兵五百名余大花を武し戦中
兵中より志田弾正幸隆八百負引除り上杉方高梨
保中軍法と名乗り志田を出て推伏せ種

の脇板の透より二刀刺中に保科弾正忠て迫し
志田より五百兵を以て戦中に志田の家人細屋先
助切合て高梨保中より高梨の志を勝の上より
打義を敵を討は保科銃保正中に保
科も三時越後方の大勢に既に危く見え
ると後詰の侍望田奥代河田井上推伸仁科
九人の侍是を見て保科に打て人と大勢
一度に関を上げ迫撃し戦後の本陣迫に所まて
切て無中に入て越後の侍衆より世話に
朝信柿崎和泉守景家小荒井高梨毛利上杉外大
関に伝る三の関の輩に迫撃て切て推寄
し戦に敵味方手負死人累を乱して敵を切

通信も併地方の九郎左衛門推立原
の所ゝ備を立てらるゝ事今戦叶とうつゝに其間に
晴信の下知にて犀川より大堀を幾筋も張流し武田
旗本の大勢彼国より永付向の者より大野の芦
荻の蔭ゝ中の細道より撫掛和を伏せ思ひ出
通信の本陣へ忍の者ゝて切て入る故城方勢通信
旗本一度ゝと敗軍仕るを武田方勝に乗追討
に仕る晴信富ゝ恨ゝ撫を立て思ひ大塚村に
備を立る敵後方定行方に定行方に
撫掛を突ゝり晴信旗本を浄禅寺川へ追入る所へ
敵後の待後部撃出る翔立る伏兵晴信旗本へ
切てゝり込ゝ伏兵旗本を立
変て討死る武田勢人馬行水の如ゝ家又は討死
数を不知通信旗本勢も五十そこ〳〵晴信旗本を
討死る敵方上条伯耆守義春入道山長尾左兵衛
元春四方より掃部少輔切込部少輔出家
宮内代青川十郎安田掃部助政虎田舎に
〳〵生捕を合力討る名仕る其年の栖の侍多く
又討死の者も多く左る信玄も二十騎許ゝて川を渡し
引除る事と通信川中〳〵第信玄と二太刀切付る
信玄も力と合せ戦事ゝ近習の武田の侍共通
信を中ゝ死ゝつも通信切拂中と二近習拂
其間に信玄と通信と組ゝ〳〵近習拂
通信〳〵ゝ武田左の侍十九人切付る通信

今の根廻りをすべて只息絶えるまでと仰せ
通信とハ不知甲斐方ゟ出て来ル拙者儀川伊豆ゟ
てゝと云ハ信濃ハ政虎と承り候ハ打止ものと殊多
しと皆々ハ面信玄も市郷川を渡り生萱山出口を
ぶぎし先陣ハ一ツゟ敗軍ゟ甲斐ハ塩
崎の方へ逃ゟも有又男津峠へ逃入ゟも此内中条
勢ハ少荷駄と雑兵国住ハ所へ塩崎百姓数千おこり
小荷駄を奪ゆゑ中条を切崩敵ゟ戦ハ敵味方の区別
上杉武田の両軍入乱敵ゟ戦ハ敵味方の区別
人数を不知ハ信玄敗軍出口と中山へ除ハ上杉勢
追出ゟて甲斐方数百人討ハ信玄ハ武田左
馬助信繁七千騎ゟ外ハ信玄ハ

節ハを以て主従を討止ゟと云ハ通信
ハ川の向の岸へ敗ゟを左馬助大ゟ上ハ出
引ハ武田ハ大将政虎と見ハ武田左馬助
見の南の敵ゟて備原せらるゝ時と呼ハ
中ハ通信ゟと云ハ政虎ハ郎等甘糟左衛守と
中者之者原の敵ゟハ不出ゟと中拾川岸ハ
左馬助ハ主従十一騎ゟ敵ハ通信ハ川岸ゟ
馬を立待ゟハ左馬助ハ左右を覗敵一騎ゟ何
信繁も一騎ゟて備原ゟ出ゟ敵ハ
知て出ゟ渡ハ政虎ハ馬を乗入左馬助
と切結ハ左馬助運尽ゟて左の方殿をうもれとも
川へ逆様ゟ落入ハ通信ハ向の岸へ乗上ゟ

騎にて甲斐へ追入候事

一説に武田方の殿軍信繁を討死せしめ村上義清方と
云て上杉家にては謙信直と称せしと申伝へ
甲斐方にては信玄二ヶ所迄深く責込申候故馬場信繁
討死之後騎馬にて少之原に被掛者二ヶ所三ヶ所にて
痛手を負ん故遂に敗軍なり跡先を以て
崩敗軍にて信玄殿を殿にて後部跡先を撫
絶を入て信玄殿を実崩にして力を得甲斐勢
を追返し本の陣所芝原に控を立て翼を張り
申時の戦天文十二年甲寅八月十日外の刻より始り
十七度の合戦なり信玄方の兵六千の内五百人
計討死にて敵方十六人なり跡先にて九百

九人討死にて三千五百人と信又十七度の合戦十一
度は謙信の殿軍にて謙信本陣を
を砂被り信玄迫返し信を張
申時は武田方は信玄深く責申故討死稀
にて少之原にて被掛者を如何と大和守を取り敵
味方奇敷上入陣彼此に謙信出馬引
永禄四年は天文十二年にて川中島合戦
の時にて正月十九日謙信は善光寺に迄
留守居を入て陣を移し信玄の軍兵九千威勢
又を出して本陣を善光寺を引揚し越後へ
（天文十二年四月十五日）
一弘治二年甲辰春政虎川中島に出張晴信も出

軍を出而敵陣に見る物人を遣さ草刈を
進ませ是迄セラル全有之信玄行ふ所戸神山の中
より信濃勢を見せ端信玄所の後へ廻り敵を
て周の勢を一度に上り切懸らハ政虎ハ後方
より長尾景勝を撃てさけ立を所を行き
て信濃を立後て討止と為ル即チ保科弾正
高州和泉守霜田信濃守佐久善信外海野
幸隆外小山田弾正虎満伊那郡高遠
十八騎を勢六千余を戸神山の若麓ヲ付て推廻
一時信ハ一騎八千ヲ以て信を立て先の合戦の始
を行ふ中ハ先ヲ十八騎を戸神山の若麓の後
を経て上杉勢の後へ推廻ると為れ

有市の敵の敵ハ許のみ通ハ敵ハ
来ル所へ用捨ハ敵関敵ハ山中ハ端通
て意彼を行程ハ敵ハ曙方ヲ集ハ信ハ廿五
の敵ハ入信玄の陣中ハ兵粮の炊烟篝火影人
馬の高鼾を聞て明朝合戦ハ疑ハ色を
察て敵玄の刻ハ政虎出異しハ子弁の軍
無ハて長尾景勝を越前中ハ先陣ハ宇佐見弾正
定行村上義清高梨摂津守政頼長尾城守政
景甘糟備前守信長全体新潟色部修理亮藤
ノ枝ハ朝信長尾左近ハ藤景ハ九郎四千五
百二の後ハ政虎横手ハ敵の寄の刻ハ信
玄の本陣へ一文字ハ切入ハ二七ハ合戦を始

中候信玄ハ思もよらぬ打ふ一ぬ手の合戦の左右を
待伸ひの如なれハ一戦なりも不及周章騒所へ越後
の兵計立打立切立切立ゆうりハ武田方仮屋を焼出後
陣理武田刑部少輔信繁小幡尾張守一条右衛門
北条左衛門佐を始め諸将ハ山内上杉管領殿一族なりとて寄てうち入れば
信玄本陣なれと敗軍なり板垣駿河守信方兵部
一条右衛門督惠甲百騎許にて迯一条右衛門督
惠甲百騎許にて迯ぬ
村上義清殿諸将を退ぬ〳〵迯を追て進所を
板垣信方一条を退ぬ〳〵迯討ぬ信玄方
武田左馬頭山伊賀守等之百騎許なりたる兵士

とて関を上る金入越後方を切立る所を板垣駿
守信方夏武部中陳越後を守信兵部少輔下知守
右方ハ引つ丹嘆叫て切立る故爰にて信玄方
大将分板垣駿河守信方一条右衛門督討死を是程
大将分山内殿助聟小幡尾張守討死を依角豊後
ハ武田方なる二枝の宮の別ハ豊後の別の
まて推返推返推返之合戦ハ信玄方敗軍
十二時迄迯ハ迯討ハ討ハ右斬と知を政虎勝
利を武田方なる戸神山より推廻なる武田のうち十二
所ハ今ハ伊川中島の鉄炮の音聞とゆ通信ハ出
越後ハ我〳〵と筑摩川を越て志賀を出て
推寄ハ時信長を力ハ得て武田を越後勢を

立挟み板を採って戦の如く越後軍敵を討ち
交ぜ不申候軍に成んと先元一所の越後方新発田
屋敷を初め諸方に放火致し候て立退き
虎口へ一所に寄って防ぎ合て四方へ追散し切崩し申
候上杉の軍勢共一所に合て軍川を引て追来る
是を見て越後の軍勢共川を渡り不通に討死と下
知して晴信の軍勢共我も〳〵と越後勢を追懸る所に上
杉の諸軍陣を引て相図一度に追懸る本道と云行て先に立
義倉勢と共に一人も不残と攻戦様に時信
方の大将分信濃伊賀と市蔵方に成て小田切方の諸軍陸
奥方の諸軍陸奥

仍杉本山伯等各撫錦を突て掛る保科弾正義倉と
引合て切懸の諸軍八先に立て追懸る杉立弱
勢と引合て軍川を渡り所を晴信の先に駆懸る
内藤修理亮宝物盗取り部大炊助内匠小角を計
等追来る所を本庄左兵衛初鹿野左兵衛
杉晴信と申て七度迄攻戦を不
新発田屋敷を新発田屋敷を東に焼申黒川伯耆守中
條城を中條筑後守其外諸軍勢八方に柳原の水
藤に廻り来て寄る名字〳〵寄手元
を引合て鬨叫て一所に寄て寄る方甲斐勢元
の後に引退越後勢八後を防て寄て川越
向の岸に寄る甲斐勢も慕んと入〳〵先き

とも戦ひ方宜敷候哉と申すの儀
口を揃へて立一戦を以て待受たるべく思れ候上申
候方ハ敵ゟ難所を去の上終夜苦労無之
て四度の合戦ゟ力も落疲候ハ疲弊候て戦ん様ぞ
あき甲斐和陣の軍兵大代り追討と申を信玄
聞て制止強き人も不追来ハ敵ゟ無ハ公の使ゟ以を
敵一和の陣へ引上候ハ上ハ此の合戦未明の中ゟ三
度相懸て四度都合七度の戦ゟ敵ゟ方討死ゟ六
十五人ゟ及ぶ味方ゟ甲斐討死四十一人ゟ及ぶ
四十七人と記し有ゟ高坂ゟも大将ゟ少ゟ原ゟ疲
守相強ゟ一条ゟ申請角ゟ初庵原ゟ申山ゟ
郡内ゟ信玄ゟ侍衆ゟ討死せしゟ四ゟ申ゟ

信玄ゟ引退候ゟ敵虎ゟ及を追ゟ川ゟ
り北ゟ上ハ信ハ二年三月ゟ和ゟ望ゟ川中島ゟ
三度の合戦ゟ有ゟ
一弘ハ二年八月ゟ上ゟ景虎川中島ゟ展ゟの陣ゟ
進ゟ行ゟ戦ゟ置ゟ陣ゟ取ゟ八月ゟ合戦
の時の陣迫ゟ村上義清ゟ妻敵ゟ陣ゟ取ゟ国を
の陣ゟ二行ゟ展ゟ時ゟ信ゟ二方ゟ千ゟ出ゟ
戦ゟの陣ゟ長陣ゟ打ゟ
ゟ由甲ゟの覗ゟ
一ゟ年ゟ戦ゟの陣ゟ
時一人も進ゟ者ゟ
ゟ有ゟ

旗指を附出し人丈ニ恭をとらせ諸軍旌を推立
陣構して川際に雖のみえたりける甲州方の軍兵
とも甚り也謙信が川を越ハのかすと此川を追打に
者共とてしめよりと晴信ハ一の木戸の井楼ニ而
遠見して曰く謙信程の大将にららく陣構して可渡様
前是を追ハ乙度とこの越一人も不可出と下知ありし如
案其夜の丑の刻ニ越後勢ハ陣所ニ火を焚事古来騒ぎ彩
敷兵晴信勢ニ知して乙人も人数を不可出ハ江
輝天明越後の陣所を見渡せハ道筋をにげ悉甲
の武者鎗長刀を持六千斗二行ニ進て敵を待居ハ
越勢の晴ニ構て其後ハ二行の隊立たるにて
長尾政景石川備後守松本大学中條越前守を備
として十隊右ニ充ハ守備の柿崎和泉守定行杉原壱岐
守山本伊豫守鬼小嶋弥太郎山田修理を備とし
十二隊中筋ハ甘粕近江守の四半旗の下景虎
旗本ヲ擁て控其勢一万余騎　甲勢に進て寄る敵
を待掛ル武田の諸軍勢是をみて此陣ハ前に推寄て
有らむ事を人も先て咄るなし　信玄の智才推量ハ程
唯名大将といふのみにあらず抜群の人なりと感ぜしむ
由て翌日晴信行を出して曰く越中ニ甲州方二万の
人数を妻女山の木蔭に密ニ伏置越後の縄を切て越
後の陣所へ放ち掛馬をもおびたゞしく入れ乱さしめ
敵陣より足軽共此馬を目ニ付て出之其時兵足軽共を
討取る計にそて御し待る程中半ニ越後の足軽

を追立ハ景虎ハ嗚呼の者程武者なるとハ而騎の甲斐
物をのかすと追立て出掛ケ之時景虎を搦取軍
のふりすてハ名誉ハ一人も無山をけ近ク取詰を実切て
そなの兵共ハ多くなりて日の下と永興矢ゑをそそ
一筒先を揃て射永掛ケと言て兵かた思セ武馬ハ之定
場を切て越後の陣而一進故ケ之程ハ十人四ケ人ケて彼の馬を
家うこつ追廻ケ匂れ者越後の陣ハ引ハ是を奪
してそ人も不出ケれハ信玄思永ケ通信名人なて此頃
ものらぬハ切者の方永之大信をこして体を永ハ不思議
なりめ信玄侍の四ケ通信一四通ハ名誉の者も者
ハらん大事のあこと四ケ永と四ケ話ケ信玄ハ
夜中ケ陣抜ケ上洛系近ケ永ケを日本ケる通信

を軍ケて抜ケ信玄と一戦知ケ来の下刻迄ケ戦
の合戦和ハ信玄ケ打負ケ引退ケ甲斐ケ
迄系烈敗戦越後勢ケ永推ケを長尾越ケ政
景ケ藤ケ勝ケ敗信ケ話ケ切ケ引ケ退し
下平ケ中大将ケ宮ケ行ケ等ケを金信
玄ケと実ケ退ケ上杉ケ南雲ケ部ケ門横合ケ実ケ
道ケを実崩ケ宮ケ陣ケ之ケ引ケを以て山
ケ信玄ケ陣ケ切ケ無ケ日ケ後ケ敗軍ケ
ケ盟ケ信玄ケ引ケ永通信ケ馬ケ入ケ甲斐ケ方ケ
十二人ケ討死越ケ方ケ八ケ年ケ人ケ討死ケ永ケ永禄二年
冬ケ通信上洛系内景ケ方義輝ケ御ケ一字ケ永ケ
景虎ケ改ケ輝ケ虎ケ号ケ細ケ川ケ興ケ没ケ免系文

の表書迄ハ申ス——論国ヲ管領職ハ辞退条柄の
今度敵の為ハ免之旨領ス依準（永禄五年十月ニ管領職ニ元任）
一永禄三年九月ヨリ謙信関東発向上州ヨリ井厩橋名和
沼田等攻撃ヲ攻落其年ハ厩橋ニ越年
一永禄四年辛酉正月輝虎ハ当家表発向の定ニて二月
古河ノ城攻撃ヲ利義氏ヲ攻ル三月ニ当家発向初て
上杉氏ヲ北条名乗回ハ月謙信作刑行中島（発向原）
山に陣ヲ下第之地道と貝塚城の通路と北山原
山の北より赤城山の下一出ル北の流を堰止場の一ヶ所
攻落山を攻ル時防使ヲ仕ル八月ハ北ヨリ信玄ハ川
中島（長下第之に陣ヲ下）西原山の下近陣ヲ下ル敵攻
方ハ安堂ヲ敵城詰ル謙信ハ敵軍の仁勢ヲ色と

多度ヲ攻ル北ヨリ信玄ハ下米之ヲ貝塚の陣（ヲ下ル）
有ヲの敵信玄ハ敵軍をとりまとり潜ル貝塚城を
出箕輪川を渡て川中島（初て）謙と三ヶ月ル城攻方敵
溢位の勢ヲ出て先ヲ敵謙信ハ北江ヲ移ル実
個ヲ代ル陣ヲ行る定行三日後ヲ出る朝信と云し
其夜ヲの刻ヲ謙信ヲ（敵ヲ）つと潜に川中島（ヲ）ル
西ヲ山陣ヲ下ル敵ヲハ村上義清ヲ梁敵井上清政
四親類鳴陣入道月下斯ヲ（ヲ）ル川中島謙信
ヲてハ北ヲ城ヲ急長敵善国屋長敦色部修理
亮長実鮎川盛ヲ下ル東蔭ヲ大川移ヲ五ヲ二年
騎ヲて箕輪川の端ヲ立貝塚城ヲ居し武田勢部
勢ヲ横合ヲ西ヲ勢ヲ攻ヲ謙信謙ハ左ヲ

先年高麗下知ある朝倉長尾政景右之者ハ柿崎和泉
守家臣二の宮ハ小嶋弥太郎長岡右馬ハ本庄安房守
芝秀左の御ハ長尾左衛門景石の二方ハ山吉孫次郎
親章中のよハ謙信猛将故敵対遊
無ハ宮内卿殿の事ハ孫四郎吉俊孫
宮内少輔左衛門尉時家柿崎和泉守時貞立位宮
仕奉ハ高麗左衛門尉ハ初信
玄方より加ハ被成十七人と成故方ハ
ハ厩橋山ハ政城故ハ
を信玄方ハ
川中島ハ
玄方ハ唯西條山の方ハ

上杉方色部修理亮長実ハ謙信に対し奉ハ
ハ敵ハ多勢と成
心得ハ色部も晩方ハ
川を越ハ
一昼夜ハ十日の朝
を進て信玄の陣へ
武田方ハ
信玄仕置奉て見ハ
毘の字書ハ
立出ハ
弓鉄砲を射立合ハ
信玄ハ
川立ハ色部修理亮長実ハ

故板倉を入れ信濃を安堵せ中に高原に知る朝信
は信玄方の田縣修理大夫を退き進む長尾
政景は北信の豪族高梨政頼と共に長尾景虎に
味方する高井郡の井上氏を攻めて先を競て信濃
を攻て信玄を助勢し遂に北信は信濃の半
分信玄と為方討ち討ち合ひ信玄
を恐れ謙信の家臣の人数を以て推上信玄猛勢
信濃に進発し武田方十二隊共に総軍に羽織
袴の侍の武士討死を反死人数を知れ申候
の方へ敵軍を越後勢の為に進発の為
武田方は我信二子許にて謙信の論を志たし為
中に是を以て越後方は信濃の中条板倉休信を

通義信つかり防戦ひ中条板倉の信を西見へ
ものを進兵の方信玄は信濃中条上杉
武田義信信濃を進発 猛勢を以数千人討死中に
十余戦勝ちを謙信少人にて元亀元年
を防んと信濃に義信は宮信玄は武田義信
と計死中を虎に与わる甘糟を信濃西信玄
を以て義信人数を倉品進発して信濃出軍
は高坂の敵を切崩し川中島東の河にて休居疲兵
を伸新仕かなよいつくり陣を張り武田義信
八万許惣甲にて優差なと永信て謙信勢の由
の方へ俄ふ永無りて謙信日の光の猛を日ふ千急
急入り越後方に新手の合戦ふ方に伸新

加賀金沢城ヲ攻メントテ防戦ノ為ニ係ル志ヲ示サル
多ハ馬ニ乗リ手ヲ尽クシテ敗軍仕ル城内勢計死数ヲ知
ラズ其国ニ四郎義時モ家ニテ討死仕ル 通信ハ南家
ノ重宝ニ被捕ヲ内ノ者ニ殺ヲ自
分ヲ確信ク拾ハ立代世平行安ノ長刀ヲ敵ニ
御戦ノ為ニ見事ニ見事ノ六個ノ内ニ城ヲ籠ル
大川強ノ勇者ニ通信方義信ヲ追ノ時ニ左
繁長自身御出ヲ打方ノ強ノ討死ヲ長尾景
仁ノ為ニ家ヲ家代ニ強ノ為ニ特命ヲ被ル
入戦信ヲ突崩ノ是ニ於テ合戦ハ打ノ通信ハ軍
ヲ背ヲ南ニ拾ハ体ニ打ノ山吉孫四郎ノ人数
津ノ敵ニ元ノ軍門ヲ出ノ人数ヲ出ル入ノ

孫ノ代ニ通信ハ十五ノ年ニ通信ハ下条宮ノ
渡リ口ニ陣ヲ立ル所ニ対ル実国ノ勢ヲ対
家代ニ強ノ家行ニ城江集人ノ者ヲ特保原
山ノ一孫ノ屋ヲ焼掛ノ通信ハ長光ノ
遠国ニ長沼ニ打入又長沼ヲ遠国ニ
ノ内体ノ神通信ノ長ノ一西陣山ノ陣ハ八月
ノ内ノ信玄ノ第宝ノ家孫ノ九月十日ノ川中
島大合戦ノ内ニ小ノ合ハ家ノ打是ノ
ヲ者ヲ友ノ

一先年ノ五ヶ度ノ大合戦天文ノ二年ニ月ノ孫七年
ノ十二年ニ中毎年ノ輝虎ノ中島ノ長晴信ト対
陣ニ成ル秋苅刈田ノ者ノ節ニ地儀ノ和睦ノ

三百四百騎を率て討ん討んとの仰せ
なれば去て信玄は輝虎の勇才を惜み通信は信玄の智
謀を恐れ互に大事と思召を還し謀を工と稱し
て挑て出ども労なき名大将中へ行筆を寄り
永禄十年永禄七年七月より信濃口の推へ地蔵嶽を設
ひ信玄陣所なる定行生害し長尾政景も果て故
信濃堀江城として輝虎が張出を信玄川中島へ設け時信
も出馬御陣なり十日餘り対陣と云共例のなれば
日と共金中にて備後なし武田家の一門家老共信玄
へ意見申て川中島上郡下郡四郡を年十二年の間
毎年の合戦止事なく出馬の勇にて遂に備後を取
武士の病労疲れ尽り見博懸付の領分計信濃

川中島四郡は輝虎一代を相隔て表裏東西東濃口へ
出張して出馬の度毎に川中島四郡を
取られ出馬の輝虎と武田家の合戦年毎を以送り
為の為と謂へ共八月十日の新時信玄の東
の運のため之出馬差出を見出し但討を出て五に備
後を思て千曲川を渡り川中島を行へも可細と
安馬表の色史として此合を輝虎の陣所へ敵を表
は上杉作示一の年表口に為示に輝虎陣より無但出馬
為の差出は馬より下り時信玄へは天文十二年より
此方十二年の間毎の戦有と云共備利の鋒目前
なて平今備後なしの間明示五を留者を以仕
の備り此度は川中島を絶五命は輝虎時信玄為

此四つの家断にて名れるより即ち安馬彦六と申
者明りの紅糸の縅に六枚兜に六尺付足達者なる者豊の人
を云出明り紅糸の仕と時信公の出申入の恵仁方わる
永切て輝虎迚る信玄の伯父なる者出方なる也
可年に明り年の刻と紅おどの仕んとの越と永禄七年八月
十五日の刻の時信方安馬彦六一騎拍の貝爽る甲方
白月毛の馬に乗て輝虎陣所まで乗向に抑なの陣
ゆり小男の鎧武者一騎小たけ馬に乗て出申し則ち
馬上にて大音声に是一番乗に無い輝虎の家老所孫
ゆ作る朝信の家来長谷川与五郎基達と申なる
小兵なれとも彦六と時の紅おどの鎧せを行方る拍初
を信んとも加勢助方ゆうちに て永く方前の底

まて出て と呼て彦六と馬を乗ちつへ取つと紅毛馬
角に彦六に六枚兜に長谷川与五郎を紅おどき時
甲州方ハ輝虎を正面と恨みるを紅おどき長谷川
ゆ掛て赤馬を紅糸上に乗ち彦六の首を取て立ち
言く指上ケ是ハ敵の長谷川与五郎と紅おどの拍初
ゆ作と呼りに敵方ゆ出て長谷川佐ゆと
一同小感ゆとよみ申に甲州方ハ此合に四ゆ騎中ゆ
を取ゆ切てあんとしめきりを時信見思外のとく
なる彦六あと程の小男ゆ容易紅とらそゆ仕合
ハ味方のゆ逆方ゆ勇て紅おどの拍初ゆ勇と約束の上
ハ川中島ハ合の逆変ハ行の永き名おく川中島四郎
ハ輝虎ゆ弟と人ゆ

十五

此折入り是にて中郡下郡抽分の欲と申すもの長
崎を始め諸の志ある人々より昨年より梨政教
中島に領位申立て候に付武田上杉の方前参
出申し右之抽位宗家年限時五年次協内様と進者
出る人数多ふ信人に申し越後上杉家より五人
出吟味と遂げて書記の者之に一冊に仕時協内書
者と住吉孫武田主馬首住吉家付の者と村上
義清の息保四郎国清書面の者と保て吟味宜
整をいたし書記の者之

上杉内

信濃助法師

丹上集人正

京長三年有十月

右一冊を南家中古人書写申候家に伝来申候
文政　月　日　写之申候　右上中抽出

寛文九年丙戌

京先年弘文院春斎被仰付日本通鑑の清選
被遂の刻仮冊雅楽頭忠清卿上杉家より被差
候一冊

千賀孫右衛門直筆

一千賀孫右衛門仮冊陸奥守史家年にて弘文院春
斎門弟千賀孫右衛門

一於江戸学士弘文院林春斎一日仮冊匠作宅へ被
参和語被申候通鑑撰中の之分遂自筆可
被申候旨仕候中島へ於て住吉へ通信合戦の次第

上杉家ニ伝ヘ神書ヲ受ケシ上杉家ヨリ池端被指
ス書写証紙幷ニ系図ニ拠ル二説ト甲陽軍
鑑ト年号月日合戦ノ仕方ヲ大ニ各別相違有之ヲ何
ト書載ス申ハ如ク不審ト　上ヘ窺ハン彼是お談ノ節
ハ撰年歴ニモ信玄家年譜ノ裏有之ヲ我等ニ
被申ハハ上杉家書出シノ通ニ任セ通鑑ニ被池信ル
甲州信玄ノ甲陽軍鑑皆偽ニ成ノミニ非ス甲州流
ノ軍法ノ理ニモ可相背ク軍鑑ヲ編ミ為ハ近代
ノ偽撰ニテモアレ高坂弾正ト有之文言迄虚言ノ様
ニ成リ〻ハ年久ク習慣シ甲州流ノ軍法モ往事ニ
相背ク間甲陽軍鑑ノ書趣ト上杉家書出シ書趣
ヲ兼記スル由春家ニ語申ス

素府ヲ計ル説

一章之坊ニ僧正天海ハ語ニ比甲陽軍鑑ト云書物
ヲ板行ス是ヲ見ルニ川中島合戦ニ信玄ト謙信ト
ノ力ヲノ年月日時場所大ニ違ヒ正信玄国府ニテ
ウケルト有之大ナル虚説ナリ甚ダ我等ハ合津ト
ノ不動院ニ信ル信玄ノ祈祷師タリ天文十二年八月
甲州ヨリ廻リニ行ク所ニ信玄ハ川中島ニテ謙信ト対
陣ト聞ヒリ川中島ヘ見舞ニ行則チ八月十五日ヨリ
信玄ニ対面シ来ル方見廻ニ被参喜悦仕ル但一番
ニ輝虎ト合戦ヲ仕ル為ハ早ニ被御乗参甲州
ニテ続ニト申ハ我等ハ聞ル驚ニテ思
ハル大檀那ノ近日大事ノ合戦云話ト被申ヲイカニ

我等出家にても同捨にして殆んど道理に合適とす
筒し相通と立帰り下宿宅に一泊して翌十八日の合
戦は山へ上り日の下に見物なれば各乗
込て輝虎も方信玄も太刀にて少時戦ひ共敵味
方推隔てられし其相信玄小屋へ我等見廻候へば
信玄驚て此方は被仰かと存ると奇特と立寄
やはと殊外慶美より其時信玄手負てまうから
被居我等申は信玄の戦まうの乗大将と大
将の太刀討合事古今ふ承無と仰手柄なりと誉
候へは信玄俄に顔色かわり機嫌アしく通信と太刀
打とられは我等に非鎧一等とサセ候信玄真似の法
は出者より知人は信玄と見の申は中と我等に

にてハ無之に同心と奥州伊達又は會津佐竹にても
信玄と通信太刀打とられなど被語ゆる無用と
と殊の外機嫌悪かりけれ去我等山の上まで迎
に見タり中と見違事
太刀打より甲陽軍鑑にてナし信玄と通信無之
（上州佐野の住相馬藤右衛門と云者武田家へ出入なり）
一其後江戸に住て相馬藤右衛門と通信ハ太刀にて
被切殺ゆと信玄は物机にて是を被受ゆと語れ
是邪太郎と相馬藤右衛門は未生以前
ノ事ナリ何トテこの家ゆや我等は其時出と見タれと佐
野川へ乗込馬上にて通信信玄とも太刀打より其節
我は四十五歳にて性と見タれと川中にて馬上の太刀

打ちりトハ語基者ヲ門ヲハ叱ハ因
偽ニ曰天海大僧正慈眼大師ハ星利ヲ方法住院義
澄ニノハ王子世ハ今男津ノ芦名盛高ノ娘永正七年
ニ誕生ス父義澄ハ蒲冠行世ト日道舎津ノ下ノ
外祖ノ氏ヲ胃平氏ト称ス寛永十九年壬午十月百四歳
而ニ年四歳之

川中島言上書終

+ 1'